

## 宮崎汎会員が見た世界第1部映画編・第12話

### ツイッターの響き、映画「第三の男」 オーストリア

ドナウデルタを巡るブルガリア・ルーマニアの旅に参加した。明日は帰国という最終日にツアーコンダクターから緊急連絡があった。アイスランドで火山の噴火があり噴煙で欧州路線は全便が欠航し、空港が閉鎖されてしまい、いつ帰国できるかまったく不明である。家族や会社に連絡したい人は、東京本社から連絡するので申し出るようとのことである。一同に動揺が走った。

仕方なく途方に暮れながら数日を過ごしたが、ブカレスト空港はいまだ閉鎖で既に一週間の足止めとなる。

コンダクターからオーストリアのウィーンの空港が再開された。問題はブカレストからウィーンまで1千キロあり、飛行機が飛ばないのでバス以外利用できる交通手段がない。このまま滞在して待つか、ウィーンまでバスで行くかどちらかに決めたいとの提案があった。無論バスで一刻も早くブカレストを脱出したいと衆議一決した。

途中ハンガリーのブタペストで一泊し、翌日昼頃ウィーン到着の予定である。強行軍なので時間を要すトイレタイムも可能な限り避けたいので飲み物はできる限り飲まないよう協力願いたいなど、話す方も聞く方も緊張感をもってブカレストのホテルを後にした。

ブタペストには真夜中の零時過ぎに到着した。翌朝8時の出発で午前11時過ぎにはウィーンにたどり着いた。そして明日の便が予約できたとの報にも接し、一同は思わず万歳の声を上げた。明朝の出発まで自由行動となった。

ウィーンは19世紀中ごろまで市内を城壁が取り巻いていたがこの城壁を全て取り除き市電が走る環状道路とした。これをリングと呼んでいる。

ウィーンはハプスブルグ家の本拠地で華やかな文化に溢れた街である。見どころは沢山あり時間がいくらあっても足りない魅力を備えている。



ハプスブルグ家のシェーンブルン宮殿とウィーン市内一望

ツアー仲間の一人がウィーンに来たので映画「第三の男」のラストシーンである並木道を歩き、遊園地の大観覧車を見てみたいといった。遊園地は広く観覧車が2つもあり、メリーゴーランドやゲームコーナーなど楽しめる施設がよく整備されている。



注) プラターとは、ウィーン  
の中心部を流れるドナ  
ウ運河とドナウ川の本流  
に挟まれた地で、市民の憩  
う遊園地になっている

### 欧州を貫き流れるドナウ川

映画「第三の男」はイギリスとアメリカの会社の共同出資により、1949年に製作された。  
舞台は第二次大戦後間もないウィーンである。

あらすじはアメリカ人のホリー・マーチンスが親友のオーソン・ウェルズ扮するハリー・ライムに誘われウィーンにやってくる。ホリーがハリーの家に行くとハリーは前日事故で亡くなったと告げられた。ホリーはハリーの葬儀でイギリス人の少佐と知り合う。

少佐からハリーは悪人だと告げられるが、親友が悪人だとは信じられず、ハリーの恋人と真相究明のため調査にあたる。事件の目撃者から現場には第三の男がいたとの証言を聞き出すも目撃者は殺害されてしまう。しかも殺害したのはホリーではないかと疑われてしまい少佐に助けを求める。ホリーは親友ハリーの密売していた粗悪なペニシリンで被害を被った患者の姿を病院で見て大いなるショックを受ける。アメリカへ帰国するため別れを告げにハリーの恋人のところへ行ったところハリーに出会ってしまう。

関係者がハリーの墓を掘り返すとハリーとは別人の遺体があってハリーが生存していることを知る。ハリーを信じたいホリーは、プラター遊園地の大観覧車に乗り二人で話し合う。しかしそこで彼の悪人である実像を知り許せなくなり、ハリーを捕まえるべく追い詰め一発の銃声を響かす。第三の男ハリーの埋葬を終え、ホリーを空港まで送る少佐の車を降りて墓地の傍でハリーの恋人を待つも、彼女はホリーに一顧だに与えず去っていく。



第三の男に登場した大観覧車



プラターの並木道

この映画を有名にしたのは、ミステリアスな物語の展開と名優オーソン・ウェルズの演技、加えてアントン・カラスの奏でるツィター（オーストリアの民族楽器）の心に浸みこむような物悲しい調べが多くの人たちの心を打ったのであろうか。

イギリス人俳優のオーソン・ウェルズは年を重ねるにつれ重厚な雰囲気をもたらし、日本のニッカウイスキーのCMで一世を風靡した。最近のCMはテンポが速く時には何を訴えているのかもよく判らないCMがあるが、ニッカのCMは今なお演者も音も鮮やかに蘇る名画の様なコマーシャル

であった。

余談

木村尚三郎東大名誉教授と会食しながらウィーンのクロワッサンにまつわる逸話を聞いた。クロワッサンはバター味の濃いパンで形状は三日月型である。

1683年強大な力を誇るオスマントルコがウィーンの城壁を隙間なく取り囲みウィーンは落城寸前だった。ウィーン市民は食べるものがなく餓死者も大勢出た。もし戦いに敗れたら戦勝国トルコに進呈しようとなけなしの粉を集め、オスマントルコの紋章三日月型に模したパンを焼いた。ところが援軍がやってきてオスマントルコ軍の囲みを解きはなってくれた。狂喜した市民はトルコに戦勝した記念としてキプフェル、フランスではクロワッサン（＝三日月の意）を定着させたのである。

余談2 ウィーンから東京への便には天使の歌声を持つといわれたウィーン少年合唱団と同じ便であった。少年たちの非常に統制の取れた立ち居振る舞いを見てさすがと感心した。（2010年）